
夏祭り

国沢裕

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

夏祭り

【Nコード】

N5156C

【作者名】

国沢裕

【あらすじ】

幼馴染のシヨウゴと、毎年恒例の夏祭りに行く俺。いつも男同士2人で行っていた夏祭りに、今年は女の子と一緒に行くことになった。色気のないレーコに、俺は少々あきれつつ……。

今日は、近所の夏祭りの日だ。去年まで、毎年俺は行っていたのだが、もう高校二年生だ。子供っぽいし、わざわざ出かけるのも億劫だなと考えていると、玄関で叫ぶ、悪友の声が聞こえた。

「タクミ！ もう太鼓の音が聞こえてんぞ！」

俺は、シヨウゴが待っている玄関にのろのろ向かう。

「今日の為に、最近ずっと百円玉を集めていたんだ」

こいつは、いつまでもガキだなあと思いながら、せっせと小銭を貯めていた幼馴染の為に、仕方なく靴を履く。

幼稚園の頃からずっと、夏祭りはこいつと二人で行っている。去年、同じ高校に入学し、一年も二年も同じクラス。いい事も悪い事も、大抵は一緒にしてきた。

外へ出ると、確かに太鼓の音が遠くで響いている。通りにも、まだ明るい時間なのに、夏祭りへ行く人の流れが出来ていた。その流れに、俺達二人も加わる。

「でも、毎年俺ら二人だけって、なんか寂しいよなあ」

俺は何気なくつぶやいた。するとシヨウゴが、俺のその言葉を待っていましたとばかりに言った。

「そう言うと思って、今年は誘いましたよお」

その時、後ろから声がした。

「シヨウゴ君、タクミ君、良かったあ！ 出会えて」

振り返ると、何と、同じクラスのアヤノが立っていた。可憐で社交性もあり成績も優秀な、学年の高嶺の花。そのアヤノが、赤の地に扇子の閉じた柄を上品に配し、黄色い帯をした艶やかな浴衣姿で俺達を見ていた。長めの髪は浴衣の襟首を意識してか、アップに結い上げている。そして手には、浴衣とおそろいの赤と黄色のツートンの中着袋。

「シヨウゴ君、今日は誘ってくれてありがとうねえ。私の住んでいる地域って夏祭り、していないんだあ」

確かにアヤノは、俺達の住んでいるこの地域の高校へ、結構な距離を電車に乗って通学してきている。

「すげえ、やるじゃん、シヨウゴ！ いいところに目を付けた！」

「あとねえ、レーコちゃんも来るんだけど。最初に待ち合わせの約束をしていた場所に、もういると思う」

……確かレーコって、見た目は結構可愛いが、俺の中では、普段から大食いのイメージがある子だ。おいおい、折角なら、もっと色気のある女子、誘ってよ。

待ち合わせの場所にしたという鳥居下の石段に近づくと、先に来ていたレーコが振り返った。薄い水色地に、大きな桃色の花が咲いた絵柄の浴衣。襟首にかかる位に裾をすいているシヨートの髪の毛の、片方の耳の上に、白っぽい大輪の花がピンでとまっている。

アヤノと並んでも、そう見劣りしない可愛さ。

結構、いいんじゃないか？

「良かったあ！ 会えるかどうか、ドキドキものだったよ」

嬉しそうに言うレーコ。

「早く行こうよ。もうお腹、すいちゃってさあ」

……やっぱり、食い気か。せつかくの薄化粧も台無しだ。

石段を上がった広い境内では、無数の提灯と裸電球が輝いていた。お腹の底に響く太鼓のリズミカルな音。子供達の歓声。屋台で陳列されている玩具や、昔ながらの屋台特有のゲームの音。すべてのものが五感の感覚を鈍らせ、俺を不思議な空間へ誘う。

そんな感覚に浸っていると、早速、俺の服の裾をちょいちょいとレーコが引っ張った。

「ねえ、りんご飴が売ってるよ！」

いきなりで呆れる俺を、その屋台の前に連れて行く。

「うん、どれにしようかなあ？」

真剣に選んだレーコは、最初にりんご飴と言いつつ、俺の予想をはずして、ちっちゃいイチゴ飴を手を取った。そして、そのイチゴ飴は、この風景の中の浴衣効果をあげる、不思議な小道具にまで見えてきた。

……なんか、レーコが食い物を持っていても可愛いかも。祭り限定の食い物&浴衣マジック、万歳！

そう思って見ていた俺の視線に気がついたのか、レーコは言った。「ちっちゃいイチゴ飴にしちゃった。おなかに余裕、作らないと。だって、これからもっと食べたいモノ、沢山あるし」

……そうだね。

りんご飴の屋台に寄ったせいで、シヨウゴとアヤノを見失った。

まあ、この道はほぼ一本道だし、そのうちに合流するだろう。俺とレーコは、さすがに手はつながないが、肩を並べて進んで行く。

その間に、焼きそばや焼きとうもろこし、イカ焼きにたこ焼き……。この女、どれだけ焼き物を食べれば気が済むんだ。

「満腹〜！」

呆れ顔の俺と目が合つと、レーコは笑いながら、さらに続けて言った。

「さあデザートは、カキ氷、冷やしパインかチョコバナナ、綿菓子に」

まだ食う気が。

「ちよつと待て」

思わず口に出した俺に、きよんとした顔のレーコ。

「デザートを美味しくする為に、ぶらぶら歩いたりして腹ごなし、しない？」

俺の提案に、少し考えるそぶりをみせたが、にこつと笑って言った。

「そうだね」

俺の言葉の中の、どこかの部分かが効いたらしい。
そして早速、縁日の定番、金魚すくいを見つけた。
「これ、やるうか」

俺の言葉に、レーコは嬉しそうにしゃがみこむ。

「私、昔からコレ苦手なんだあ」

そう言いつつ、受け取ったポイをゆっくり水に沈める。

跳ねる金魚が、すぐに尾びれで紙を破る。

さらに歩いていくと、俺の中で毎年コレは外せないという射的を見つけた。レーコはそばで見ていると、嫌な顔をせずに言うので、俺は、ちょっといい所を見せてやるうと士気が高まる。

そして、お皿に乗ったコルク弾を五つ受け取りながら、俺とほぼ同時にお金を手渡した、隣の男の顔を何となく見た。眼鏡をかけた真面目そうな風貌。確かこいつ、隣のクラスの奴だ。頭は良いが、根暗で無口な変わり者と言う噂を聞いた事がある。そいつも意外な事に、浴衣姿の彼女連れだった。

俺は妙に、闘争心が沸いた。

こいつより、絶対多く落してやる。

早速俺は、弾を一つこめる。隣の奴を何気なく眺めたら、弾を込めた後、何と銃口を下に向け、台に押し付けながら平らにならしていた。こいつ、そこまでやるのか？

俺が次に景品へ目を向けた時、レーコが言った。

「ねえ、あのキャラメルがいい」

……ここまでできて、まだ食い物か！ しかもキャラメルって、結構景品の中では重い部類だぞ。などと、心の中で文句を言っても仕方がないので、俺はキャラメルの箱を狙う事にした。

縁日の射撃のお約束。出来るだけ片手で前にのび出し、景品に銃口を近づけて撃つべし！ だが、やはり箱は重く、当たって動いたのに倒れなかった。

二つ目の弾をこめる。

隣の奴はと見ると、いかにも狙撃という構えで狙っている。だが、どれを狙ったのか、何もかすりもせず弾が飛ぶ。

そいつの連れていた彼女が言った。

「全然当たらないじゃん」

「……一発目は、これの癖の確認」

俺はそいつの返事を聞きつつ、変わり者って噂を再度思い出す。

二発目も当たったが倒れなかった。だからキャラメル重いんだって。そう思いながら三つ目の弾をこめている時、隣の奴の二発目の弾が、景品を落とした。くそ、先を越された！ しかもキャラメル！！ 奴の彼女が嬉しそうに感嘆の声を上げる。

「やったあ！ さすがプロ！」

プロ？ そうか、変わり者って噂、ガンマニアって意味か。俺は、自分の心の中だけとは言え、変な奴に勝負を挑んでしまった。

結局、俺は全部当てたが、一つも倒れなかった。戦利品なし。当たっても倒れないと貰えないのが、この縁日の射的の辛い所。レーコに、いい格好が見せられなかった。

そして、その場から離れようとした時、隣の奴の彼女が話しかけてきた。

「これ、どうぞ」

そして、差し出されたキャラメルの箱、二つ。奴は、その後の四発全てを、キャラメルに当てて落とした。ガンマニアのおたくに情けをかけられ、受け取れるかと思いきや、

「わあ！ ありがとう」

レーコは嬉しそうに受け取った。

……女は、男の中の緊迫感がわからないらしい。

その後、レーコは空クジなしのくじ引きのお店でトランプを当て、

イチゴのカキ氷を食べながら、ご満悦の様子。

「結局、あれからアヤノ達に会えないね」

そう言いながら、レーコが俺の方を向いた時、俺達は、前でたまっていた集団にぶつかってしまった。

「ぶつかつたオトシマエ、どうつけてくれるかなあ？」

俺とレーコは明るい電気の下から横の暗がりの場所へ、五、六人のチンピラ集団に引つ張り込まれる。完全に怯えて言葉の出ないレーコに、一人が言った。

「この彼氏とじゃなくて、俺らと遊んでくれるんだよな」

その言葉を聞いた途端、俺は思わず油断している連中の中からレーコを引つ張り、人ごみの方に押し出しながら言った。

「逃げて！」

驚いたように振り返つたレーコは、でもそのまま人の波にのまれた。

……何も考えずレーコを逃がしたが、俺はどうすればいい？

「この野郎、カツコつけてんじゃねえ！」

俺は突き倒され、連中に囲まれた中で尻餅をつく。ドラマじゃ主人公が格好良く大立ち回りでもやるのだろうか、俺は喧嘩をした事がない。ボコボコにされる。そう覚悟をした時、急に連中の表情が変わり、後ずさりをした。

「何だよ！ 仲間がいるなら最初にそう言え！」

そう捨て台詞のような事を言いながら連中は、俺を振り返りつつ人の波に消えて行く。俺は訳がわからず、尻餅をついたまま、周りを見回した。

すると、俺の後ろで、二人の男が並んでこちらを見ていた。一人は眼鏡を外していたが、さっき射的で隣にいた変わり者。もう一人は俺と同じ高校だが、暴走族に入っているという噂の男。俺は、せつかく連中が去ってくれたのに、今度は、こいつらに因縁をつけられるのかと思ってしまった。

だが、変わり者の方は眼鏡をかけなおし、族の方は踵を返す。

……もしかして、こいつらを見て、さっきの連中は逃げたのか。こいつら、ただ立っていただけだが、俺は助けられた形になるのか？

「お巡りさん、こっちこっち！」

その時、レーコがお巡りさんを連れてきた。連中は逃げた後だったので、俺はお巡りさんにお礼を言う。そして、レーコにもお礼を言った。

「やだなあ。お礼を言うのは私の方だよ。ドラマのヒーローみたく、助けてくれたんだもの」

照れたようにレーコがそう言った時、タイミングよく頭上に、打ち上げ花火が上がった。

……心理学の本で読んだ事がある。

『ドキドキしている時、その時に見た異性に好意を持つ』

遠くの太鼓の響きも聞こえるし、チンピラにも絡まれるし、今は近くで上がる花火の破裂音も、俺の心臓に響いている。

だから俺が今、花火の光で浮かび上がるレーコの横顔に、ドキッとしたのは、きっとそのせいだ。

翌日は、高校の登校日だった。

靴箱の前で、結局あれから合流できなかったシヨウゴと出会う。

「シヨウゴ！ 昨日はどうだったんだよ」

嬉しそうなシヨウゴが、得意そうに俺に言った。

「まあ、アヤノと二人でデート出来たってだけで、皆より一歩リードって感じたねえ」

そしてシヨウゴが聞いてきた。

「お前の方はどうなったんだよ。レーコ可愛いだろ？」

「まあ、ぼちぼち」

日が変わると、当然だが昨日のドキドキ感は消えていた。これで今日、レーコに会っても特別に何も感じたりはしないだろう。そう思いながら、教室に向かう廊下を歩いていると、前から一人の男が、

こっちに向かって歩いて来た。

……昨日チンピラが逃げた時、俺の後ろに立っていた、族の方だ。俺は、そいつが前まで来た時、妙な威圧感の為に緊張して下を向いた。ショウゴも関わりを避ける為にか、あらぬ方を向いている。

そしてすれ違う瞬間、そいつが俺の耳元でささやいた。

「身体張って女護るなんざ、カツコイイじゃん」

振り返ったが、そいつは何事もなかったように歩いて行った。

何だか、俺は妙に気分が高揚したまま、教室に入る。すると、既に寄り集まって、トランプで遊んでいた女子数人が振り向いた。その中にいたアヤノとレーコも、一緒にこっちを見た。レーコは俺に眼をとめると、照れたように微笑んで、手に持っていたトランプを、ひらひら見せた。

俺の心臓には、もう消えたと思っていた昨日の花火の音が、まだ、しっかりと響いていた。

(後書き)

ここでの、初めての短編アップです。よろしければ評価の方、どうぞお願いいたします。

夏祭り

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5156c/>

夏祭り

2009年3月24日10時36分発行